

私は被爆体験伝承者の大石秀邦と申します。講話は約45分、残りの時間で皆さんからの疑問や感想にお応えできればと思います。

本日は次のような流れでお話をさせていただきます。どうぞよろしく申し上げます

これは（1945年8月6日午前8時15分）、世界初の原子爆弾が広島市中心部に向けて投下された日付と時刻です。こちらは（1945年8月9日午前11時02分）、二発目の原子爆弾が長崎市の上空約500mでさく裂した日付と時刻です。

私たちの人生には、後から考えてみれば偶然であったり、あるいは運命的であったりする出来事がつきものかもしれません。投下から43秒後にさく裂をしたとされる広島原子爆弾ですが、8時15分、この1分という時間にも一秒一秒の積み重ねがあり、そのわずかな数秒の差が生と死を左右したという事実についても、被爆者である梶矢文昭さんの体験をもとにお話しをさせていただきたいと思います。

まずは「原子爆弾の被害の様子」についてです。

今から（80）年前の8月6日、現在のJR芸備線矢賀駅の上空9,600メートルを飛行するアメリカ軍の爆撃機B-29（通称：エノラ・ゲイ）に積み込まれた一発の原子爆弾（通称：リトルボーイ）は、広島市の中心部に架かる相生橋をめがけて投下。そして現在の島内科医院の上空600メートルでさく裂しました。

なぜ、広島に世界発の原子爆弾は投下されたのでしょうか。

中国山地に源を発する太田川、その下流域のデルタ（三角州）上に形成された広島市は、平野部への出口の西と東に小高い山々がそびえ、そして、南へと向かって数本の支流に分かれた川が瀬戸内海へと流れ込んでいます。

そして、市の中心部から半径2～3キロメートルの市街地を有するという地理的

な特徴を持っていました。それは、世界で初めて使用される原子爆弾の破壊力（とりわけ爆風のエネルギー）やその効果を測るうえで、広島市は適した地理であると考えられていました。

さらに、1894年の日清戦争をきっかけに「軍都」（陸軍の中心地）として発展した広島（廣島）には、軍事関連の施設や軍需工場などの攻撃目標が多く、また、アメリカをはじめとする連合国の捕虜たちを収容する施設はない、と思われていたことなども、最終的に広島が第1投下目標となった理由とされています。

1945年当時、広島市に住んでいた人々は28～29万人で、その他、周辺の郡部からの通勤者、空襲による火災の広がりを防ぐために、建物を壊して空き地を作る作業（「建物疎開」）などに動員された学生や大人、また軍需工場などで働かされた朝鮮人労働者たち。さらに、軍人や軍関係者、留学生や捕虜などを合わせると、原子爆弾が投下された時、広島市内には約35万人前後の人がいたと推計されています。

運命の8月6日、原子爆弾が投下される午前8時15分までを振り返ってみましょう。

原子爆弾（リトルボーイ）を積み込んだエノラ・ゲイ号が、科学観測機と写真撮影機を伴い、広島から約2,740キロメートル離れた太平洋（マリアナ諸島）に位置するテニアン島の基地を飛び立ったのは日本時間の午前1時45分でした。それらに先立ってアメリカ軍の気象観測機、三機のうち一機が、九州方面から広島県の上空へ飛んできたため、午前7時9分に警戒警報が発令されました。

「広島の日候は良好で、爆撃は可能」とエノラ・ゲイ号に伝えた気象観測機はそのまま広島の上空から飛び去り、午前7時31分に警戒警報は解除。ほどなくして、無警戒に近い日常の生活が始まりました。その後、午前8時6分に福山市西部の上空を、そして、原爆の投下前には現在の東広島市西部の上空を越えて西へと進む、

エノラ・ゲイ号を含めた大型機3機が発見されていました。しかし、広島市民への新たな警戒警報の発令には至らず、世界初の原子爆弾は、広島市中心部に向けて投下されたのでした。

広島に投下された原子爆弾（リトルボーイ）は、ウラン 235 の原子核が連なって分裂、そして爆発をするときに発生する巨大なエネルギーを利用したもので、核分裂から爆発に伴って放出された「熱線」「爆風」そして「放射線」が複雑に作用し、人体や建物に大きな被害をもたらしました。市街地のほぼ中央部上空で爆発したため、その被害は（同心円状に）市内全域へと広がりました。

爆心地から半径2キロメートル以内の建物はことごとく倒され、焼き尽くされました。そして1945年12月末までにおよそ14万人（誤差±1万人）の人々が原子爆弾を原因として亡くなったと推計されています。そのうち名前と年齢が判明しているのは89,205人（2019年3月末）です。

続いて、核分裂から原子爆弾のさく裂によって放出された「熱線」「爆風」「放射線」の威力について、順に見ていきましょう。

まずは「熱線」です。原子爆弾のさく裂によって生じた「火の球」（火球）の表面温度は、さく裂から約0.2秒後にセ氏7,700度に達したと推定されています。ちなみに太陽の表面温度は約6,000度です。まるで「小さな太陽」が地上わずか600メートルの上空に突然現れたようなものでした。

熱線を浴びた爆心地周辺の地面の温度は3,000から4,000度に達したといわれており、爆心地から1.2キロメートル以内で、さえぎるものがないまま熱線を直接受けた人は、皮膚（上皮）はもちろん、身体の内部にまで大きな障害を負い、そのほとんどは即死または数日以内に亡くなりました。また、爆心地から半径3.5キロメートルまでの地域にいた人も、素肌の部分に火傷を負いました。

鉄の溶け始める温度は約 1,500 度といわれていますが、原子爆弾が放出した熱線のすさまじさがわかります。

次に「爆風」です。原子爆弾は空中でさく裂した直後に、高温そして高圧の空気の壁ともいえる「衝撃波」（圧力波）を発生させました。その「衝撃波」の後ろから吹き抜ける爆風の速さは、爆心地から 100 メートルの場所で毎秒約 280 メートル（ちなみに新幹線の秒速は約 70 メートル）、その圧力は爆心地から 500 メートルのところでは、1 平方メートルあたり約 11 トンに達したといわれています。爆風で吹き飛ばされ、倒れた建物の下敷きになって亡くなった人、下敷きのまま、その後に発生した火災で焼け死んだ人も多くいました。また、割れて飛び散ったガラスの破片などが体に突き刺さったり、大きな破片によって血管や神経を傷つけたりすることもありました。

原子爆弾が放出した全エネルギーを 100% とすると「爆風」はその半分の約 50% と言われており、その破壊力の大きさが伺えます。

そして、火薬を使った爆弾と原子爆弾の決定的な違いが「放射線」の放出です。核分裂そしてさく裂から 1 分以内に放出された放射線を「初期放射線」とよび、そのうち中性子線とガンマ線が地上に到達し、直接、人体に大きな影響を及ぼしました。また、放射線を浴びた土や金属などはそれ自体が放射線を出す物質となり、巻き上げられたチリやススなどの降下物とともに「残留放射線」を放出しました。放射線は、体の奥深く細胞にまで入り込み、白血球や赤血球の数の減少など、血液の異常を引き起こし、血液を造る骨髄の機能を壊しました。また、肺や肝臓などの内臓も侵すなど、人体に深刻な障害を引き起こしました。

爆心地から 1 キロメートル以内で、さえぎるものがないまま原子爆弾の初期放射線を浴びた人は、致命的な影響を受け、その多くは数日のうちに亡くなりました。

被爆直後から短期間のうちにあらわれた「熱線」「爆風」「放射線」などを原因とする一連の症状を「急性障害」といい、火傷や外傷以外に発熱・吐き気・下痢・出血・脱毛・倦怠感（だるさ）など、様々な症状が現れました。「急性障害」はその年の12月末までにほぼ落ち着きましたが、「放射線」による影響はその後も長きにわたって様々な障害を引き起こし、被爆者にとって、その危険性や不安は現在も続いています。

2歳の時に被爆した佐々木禎子さんと「折り鶴」の実話については皆さんもご存知だと思いますが、禎子さんは、被爆から9年後にあたる11歳（小学校6年生）の時に急性骨髄性白血病（亜急性リンパ性白血病）を発症し、「折り鶴」へ託した願いもむなしく、その翌年の1955年10月に亡くなりました。

原子爆弾の恐ろしさの一端についてお伝えしましたが、今から（80）年前それは確かに存在したのです。

さく裂した世界初の原子爆弾。その「きのこ雲」の下を生き延びることができた人々や焼け野原となった広島市内へ、捜索や救援で入った人々は、何を体験し、そして何を思い、何を考えたのでしょうか。

今日はそのお一人である梶矢文昭さんの被爆体験についてお伝えをしたいと思います。

梶矢さんは、1939（昭和14）年3月生まれの、現在（85）歳。被爆当時は6歳で、現在のマツダスタジアムに近い荒神町国民学校の1年生でした。ご両親そして二歳上のお姉さんらとともに広島駅の近くで暮らしていました。

当時、都市部の小学生は、激しくなる空襲から若い命を守ること、そして、素早い避難や防火活動などを目的に、より安全な地域へと一時的に移住をさせられました。これを「学童疎開」とよんでいます。「学童疎開」には3年生から6年生の児童

を、学校ごとに避難させる「集団疎開」や個人的に親戚や知り合いなどに引き受けてもらう「縁故疎開」などがありました。

一方、中学校や女学校などの生徒は「勤労働員」に駆り出されました。原子爆弾の投下当日には約8,200人の生徒（主に1年生です）が、爆心地近くの野外で、火災が広がるのを防ぐために、家屋を壊して空き地を作る「建物疎開」などの作業などに従事していました。

梶矢さんのお姉さんである小学校3年生の文子さんは、新学期に入り、お母さんの実家である現在の北広島町大朝の親戚宅へ「縁故疎開」をしていました。しかし、訳あって原子爆弾の投下前には自宅に戻っており、弟の文昭くんとともに、自宅近くの大須賀分散授業所に通っていました。分散授業所とは、次第に激しくなる空襲から児童を守るため、より自宅に近い民家やお寺などに設けられた臨時の授業所のことです。広島市中心部のほとんどの学校で実施されていました。

ここからは、梶矢文昭さんが描かれた絵をもとにお話をさせていただきます。皆さんも、6歳の文昭くんになって、その体験談を受け止めてもらえればと思います。

運命の8月6日、朝、7時半過ぎ、警戒警報解除の通報を受け、きょうだいはお母さんに見送られ、爆心地から1.8キロメートルの距離にあった大須賀分散授業所に向かい、朝の掃除に取りかかっていました。

原子爆弾のさく裂直前、文昭くんは玄関付近で拭き掃除、そして、お姉さんの文子さんは、汚れたバケツの水換えのため、奥の台所へと向かっていきました。どちらが水を換えに行くか、事前に少し言い争いになりました。そのわずか数秒の、屋内での移動が二人にとっての生・死の分かれ目となったのです。

何かの気配を感じた文昭くんは、掃除の手を止めて南側の庭の方向に目をやりました。その時、「ピカーッ」と、ものすごい閃光（瞬間的な強い光）を感じ、庭の

八手の葉っぱが真っ黒に溶けるのを見ました。直後に「ドゥーン」という爆風におそわれ、分散授業所の家屋は一瞬にして崩れ落ち、そこに居た者は柱や土壁の下敷きになりました。

暗闇と恐怖のなか、助けに来てくれる人を待ち、文昭くんはしばらく身動きをせずじっと耐えていました。

どれくらいたったのか、破れた屋根から外の光が漏れてくるのを見ると、その方向をめざして死に物狂いで、柱や土壁の隙間をくぐり抜け、崩れた屋根の上へと這い上がっていきました。その時の土壁やわらの腐ったような匂いは、今でも覚えているそうです。

目の前にはすでに、血を流し、火傷をし、骨折をした被災者が、ぞろぞろと長い列をなして避難していました。文昭くんもその列の流れの中に入りこんで、ただただ、夢中で、がれきの道をはだして逃げました。「1年生の6歳で、自分なりに、よう、逃げたもんじゃと思います」と梶矢さんは当時を振り返って話されます。

続いて、文昭くんの避難したルートやその様子をお伝えする前に、みなさんには大まかな地理や地名などをつかんでおいていただきたいと思います。

広島駅の西側付近から饒津神社の横を流れる京橋川沿いの道に出た時、川岸の石段や川原には数えきれないほどの被災者を、そして川面を流れ、漂う、多くの死体を目の当たりにしました。また、川沿いの崩れた家から火が噴出し、向こう岸の白島方面にも炎が上がり始めていました。見知らぬ大人たちについて懸命に逃げ続けた文昭くんは、神社沿いの道を越えて、二葉山の中腹まで逃げのびました。

そこから見下ろす広島市内は全面火の海となっており、避難した人々は、黒煙を巻き上げて燃え上がっていく広島を、ぼう然と眺めていました。

夕方になって炎が衰えを見せ始めると、避難していた人々は山を下り始めました。

文昭くんも近所のおばさんに連れられて山を下り、家族が生きていれば、避難しているであろうと思われる東練兵場（広島駅の北側に広がる陸軍の演習場）へと向かいました。

その途中でおばさんとはぐれてしまい、不安や恐怖のなか、一人になってお父さんやお母さんを探しながらさまよっていると、別の近所のおじさんが見つけてくれ「お父さんやお母さんは生きとってじゃ。ほいじゃが、お母さんは大けがじゃ、早う行かにはお母さんは死ぬるで」と言われ、文昭くんはその場で大泣きをしたそうです。

家族が避難している場所まで連れて行ってもらい、やっとのことで再会ができたのは夕方の7時過ぎ、お母さんの左目にはガラス片が突き刺さり、顔はガラスによる切り傷で血まみれ、その場にうずくまりながら「ウン、ウン」と呻き続けていました。そのお母さんの前には、今朝、分散授業所で一緒に掃除をしていた文子さんの遺体が横たえられていました。文子さんは、分散授業所の台所付近で、崩れた柱に体を挟まれ、ほぼ即死の状態だったそうですが、分散授業所が燃え上がる前に、お父さんによって引き出され、重い傷を負ったお母さんとともに広島東照宮という神社と東練兵場が接する山手へと運ばれていました。

予期せぬ、そして残酷な死にもかかわらず、お姉さんの表情には、かすかな「ほほ笑み」が浮かんでいるように、幼かった文昭くんには見えました。その「ほほ笑み」は、梶矢さんご自身が年齢を重ねる中で「謎」の一つとして心に残り続けました。

梶矢さん家族は、「水を、水をくれ〜」という被災した人々の呻き声が響き渡り、多くの死体が横たわる、まるで「地獄」のような東練兵場で、三日間を野宿で過ごしました。時に、救援隊や陸軍から、おにぎりや乾パンの差し入れがあったそうで



すが、悲惨な状況にもかかわらず、「整然とならんで差し入れを受け取る被災者の姿や、乾パンの袋に残っていた金平糖（砂糖菓子）のかけらの甘さが今も心に残ったりします」と梶矢さんは話されます。その後、馬車で迎えに来てくれた親戚と一緒に、母の実家（北広島町大朝）へと避難し、しばらくそこで生活することになりました。

親戚とはいえ、原子爆弾や放射線に関する知識が十分でなかった当時、「原爆症はうつる」といったうわさや偏見などで、離れの納屋に、ムシロを敷いただけの厳しい生活が続きました。

その後、避難先の母の実家から広島市内へもどり、焼け跡に建てた小屋からの再出発となりました。再開した小学校はいわゆる「青空教室」で、進学した中学校には未だ校舎は無く、遠方の学校への仮通学を余儀なくされました。

梶矢家は経済的には苦しい状況でしたが、ご両親やきょうだいの支えによって、梶矢さんは高校・大学へと進学し、1962（昭和37）年に小学校の教師になりました。

原爆で大けがを負いながらもお母さんは94歳（1994年）まで生き抜かれました。それでも毎年8月6日がやって来ると、お母さんは泣きながら手を合わせて拝んでいたそうです。

仕事に就いた梶矢さんが30歳になった頃、あまりに「めそめそ」と泣き続けるお母さんの姿を見かねて、「お母さん、ええかげんにせいや、幾ら泣いたって死んだ者が生き返ることはなかろうが」と叱りつけたことがありました。そうすると、お母さんは、梶矢さんに、お姉さんのことを初めて話してくれました。それは、3年生になったお姉さんが「縁故疎開」で親戚の家に預かってもらっていた時のことでした。

お母さんが着替えなどを持って北広島町大朝の実家を訪ねた際、お姉さんは「私

も連れて帰って、連れて帰って、お願い、お願い」と、一晩中、お母さんのそばを離れなかったそうです。お母さんは何度も「だめ、だめよ」と言って諭しました。何とかお姉さんを説得して、お母さんだけを乗せた帰りのバスが走り出すと、なんとお姉さんは懸命にそのバスを追いかけてきたと言うのです。その必死な姿を見かねた乗客の方々から、バスを停めるよう声が上がり、バスは停まりました。

お母さんにすがりついたお姉さんは「うちゃ死んでもええ、死んでもええけえお母さんと一緒がええ」と泣きじゃくりました。さすがにお母さんも「ようわかった。死ぬときは一緒に死のうね」と広島へ連れて帰ったのです。バスの中で安心して寝込んだ顔と原子爆弾で死んでいった時のほほ笑んでいるような顔が「いっしょじゃった」、「あの子は心の優しい子じゃった」とお母さんは話してくれました。

安全な疎開先から自宅へ連れて帰ったことで、結果的に娘だけを死なせてしまったことに対し、お母さんは自分自身を責め、そして、悔い続けていたのです。

木造の住宅内で被爆した人は、爆風によって押しつぶされて亡くなったり、建物の下敷きで身動きが出来ないまま、その後、発生した火災で焼け死ぬ人も多くいたこと、また、梶矢さんきょうだいの生死を分けたのは屋内の居場所だったことは先ほど話しました。

ここからは、梶矢さんが被爆体験をお話しされる際にいつも登場する原民喜、そして、私の父（大石正文）の被爆体験を加えてお話を続けさせていただきます。

広島市出身の詩人で小説家の原民喜は、病気で妻を亡くした翌年の1945年、40歳の時に、爆心地から約1.2キロメートルの距離にあった実家の便所（トイレ）の中で被爆をしました。その後、崩れるのを免れた便所（トイレ）から自力で脱出し、迫りくる火事嵐の中を、家族や多くの被災者らとともに広島東照宮へと避難しました。

その場所で、被爆の瞬間から避難の途中で目にした悲惨な状況を細かく手帳に記すとともに「コハ 今後生きノビテ コノ有様ヲツタヘヨト 天ノ命ナランカ」（これは今後も生き延びてこの悲惨な状況を伝えなさいという天の命令ではないだろうか）との、生きる決意を綴り、後にその体験を小説「夏の花」として発表しました。しかし、1951（昭和26）年に46歳の若さでその生涯を自ら終えてしまいます。被爆者そして表現者として、生きることや心身の健康にどのような不安があったのかはわかりません。それでも、私たちは、残された彼の作品などで被爆の実相や被爆者の苦しみや悩みに近づくことができます。梶矢さんは、被爆体験の講話に臨まれる際には原民喜が手帳に記した「コハ 今後生きノビテ コノ有様ヲツタヘヨト 天ノ命ナランカ」の言葉を思い起こしているそうです。

一方、私の父である大石正文も同じく爆心地から約1.2キロメートル、現在の縮景園の正門付近にあった家の中で被爆をしました。父は当時14歳で、広島商業学校（現広島商業高等学校）の3年生。8月6日の月曜日は工場が休みで、動員先（日本製鋼所）へは行かず、いつもより遅い朝食をとっていたときに被爆。台所の勝手口の方向へ飛ばされた小さな体は、上り口の四角い空間に「すっぽり」と納まったそうです。その段差によって体は守られ、崩れた家屋から自力で脱出することができました。外にいた叔母さんは、熱線によって背中から手足の裏全体に大火傷、そして、爆風に吹き飛ばされて頭に重傷を負い、8月18日に亡くなりました。

火災による火事嵐や竜巻が発生するなか、父らは重症の叔母をつれて川を渡り、避難所の東練兵場を經由して、約4キロメートル先の親戚宅にたどり着きました。

翌日、汽車と徒歩で実家へたどり着いた父は、放射線による「初期症状」だったのでしょいか、数週間、高熱と扁桃腺の炎症に苦しみますが、次第に健康を回復していきました。

父は、自分自身の被爆体験について何かに書き記すとか、筋道をたてて話をするということはほとんど無く、時々、酔いに任せて自らの体験をしゃべり、「人間の人生はそんなもんじゃないんじゃ」と一方的に不満や愚痴をこぼすぐらいでした。父は2007（平成19）年に肺癌で亡くなり、すでに（17）年が経過しています。「伝えてはみたいが、文字や言葉では語れない。できるなら思い出したくない、忘れてしまいたい」といった複雑な気持ちを抱えていたのではないかと私は思います。また、「被爆者健康手帳」は知り合いの方の勧めで、1969（昭和44）年、38歳の時に取得しますが、どこか後ろめたい気持ちを持っていたように私には思えました。

人にはそれぞれの生き方や在り方、そして考え方があるように、被爆者にもそれぞれの思いや苦悩、そして願いがあると思います。被爆体験証言者である梶矢文昭さん、そして、原民喜、私の父の三者には面識はなく、年齢や立場、そして、被爆後の生き方も異なる存在ですが、京橋川を挟んで比較的近い場所で被爆し、幸運にも、倒れた家屋から自力で脱出できたこと、そして避難したルートやその途上で目の当たりにしたであろう被爆の惨状には重なるところが多くあると思っています。

最後に「ヒロシマをつなぐ」というテーマでお話をさせていただきます。梶矢さんは、1990年代の中ごろまで、教師として被爆体験を語ることはあまりなかったそうです。

しかし、校長となられた1994年頃から自らの被爆体験を語る機会が少しずつ増えていったそうです。小学校の低学年にも関心を持たせるために自ら絵を描いて、紙芝居風にして伝えるような工夫や改善を重ねて来られました。また、退職後は「ヒロシマを語り継ぐ教師の会」を組織し、証言活動を継続的に取り組んで来られました。さらに、2020年から「広島平和文化センター」の被爆体験証言者となられ、自ら証言活動を続けられるとともに、被爆体験伝承者の養成にも力を尽くしておられます。

梶矢さんはいつも被爆証言の最後に「三度目は許しちゃいけないのです」「平和は尊いぞ」と強く訴えられます。「広島・長崎に続く原爆投下は絶対にあってはならない」との思いや願いこそが、梶矢さんご自身の証言活動そして伝承者の養成活動を支えておられます。

現在、世界には(12,121)発(2024年1月現在:ストックホルム国際平和研究所が7月に発表)の核弾頭(核兵器・核爆弾)が存在し、実際に配備されている数は(3,904)発といわれています。また、核分裂による原子爆弾に対し、核融合による水素爆弾などの威力は、最大で広島型原爆の約1000倍ともいわれています。

予想されるその被害の大きさから「使えない兵器」ではあっても、それを持つことで攻められないといった「核抑止論」が核保有国の考え方になっています。

さらに、2022年からのロシアとウクライナの紛争や2023年から激化したイスラエルとパレスチナ(ハマス)との紛争以降、「劣化ウラン弾」の使用や小型核など「使える核兵器」の議論が度々聞かれるようになっていきます。核兵器の開発や保有はもちろん、それによる脅し(威嚇)や援助も禁止する「核兵器禁止条約」が2021年に成立(発効)した一方で、最近の核兵器をめぐる国際情勢はたいへん厳しい状況にあるといえます。

多発する国家や民族の対立によって、核兵器を無くしていく道は困難を極めていますが、あらためて私たちは、(80)年前の被爆の実相に深く学び、原子爆弾の投下につながってしまった歴史やその背景を正しく知ること。さらに、被爆者の願いを聴き、受け止め、それらを様々な方法で、継続的に伝えていく地道な活動こそが、最も強い「抑止力」であること、また一般市民を巻き添えにする戦争や武力での対立に「勝者」などはないということをけっして忘れてはならないと思います。

小さな力ではあっても、私たちにできることを考え、少しでも行動に移していくこ

とが、被爆者の願いに応じていくことになると思います。

最後になりましたが、私たちの現在や未来は、地震や豪雨など自然の力に対して無力な面もあり、時に「運命」として受け入れなければならないこともあるのかもしれないかもしれません。しかし、核兵器の保有や使用、また、その前にある武力での対立は「運命」などではなく、人が行う「人為」であり、人がもたらす「人災」です。絶対に避けねばなりませんし、避けることはできるはずです。

平和大通りから公園内を北へと貫く「平和の軸線」上には平和記念資料館の本館、原爆死没者慰霊碑そして原爆ドームが一行に並び「平和は与えられるものでなく、創り出されるもの（創り出すもの）」という設計者の理想が示されています。

そして、1996年にユネスコの世界遺産として登録された「原爆ドーム」は、平和公園内外の慰霊碑や記念碑とともに、核兵器廃絶に向けた「無言の訴え」を続けています。

以上で私からの講話は終了させていただきます。何か質問や感想等がありましたらお願いします。

本日は被爆体験伝承講話にご参加いただき、ありがとうございました。